

付録 8

とりなし（インターセッション）の神話

神以外の誰かが、私たちの罪を赦したり願いを叶えたりするために、私たちの代わりにとりなしてくれると信じることは、神に共同者を立てることであり、それは偶像崇拜である。コーランは「すべてのとりなしは神に属する」（39:44）とし、「審判の日にはとりなしはない」（2:254）と宣言している。

とりなしの神話は、何百万人もの人々を偶像崇拜へと担ぎ出すための、サタンの最も効果的な策略の一つである。何百万人ものキリスト教徒が、イエスが神の前で自分たちのためにとりなしてくれると信じ、何百万人ものムスリムが、ムハンマドが自分たちのためにとりなしてくれると信じている。その結果、これらの人々はイエスやムハンマドを偶像化している。

とりなしという概念は、まったくもって非論理的である。例えばムハンマドのとりなしを信じる人々は、彼が神に自分たちを許し、樂園に入れてくれるよう頼んでくれると主張する。彼らは、ムハンマドが審判の日にとりなすべき候補者を選んでいよう姿を想像している。もし彼らに「ムハンマドはどうやってとりなしに値する人物を見分けるのか？」と尋ねれば、彼らは「神が彼に教えるのだ！」と答えるでしょう。この概念によれば、ある人がムハンマドのところへ行き、とりなしを依頼する。するとムハンマドは、その人物がとりなしに値するかどうかを神に尋ねます。神はムハンマドに、その人物は樂園に行く価値があると告げる。するとムハンマドは神の方を向き、その人物は樂園に行く価値があると神に伝えるのである！この冒涇は明白である。とりなしを信じる者たちは、神を自分たちの偶像であるムハンマドの秘書官にしてしまっているのである。神に栄光あれ。

コーランは最も正確な書物であるため、樂園にいるすべての人が愛する人のためにとりなす（祈る）ことは認めています。「神よ、どうか私の母を樂園に入れてください」といった具合です。このとりなしは、もしその人の母親が樂園に行くに値する場合にのみ機能します（2:255, 20:109, 21:28）。したがって、とりなしはこのように行われはするが、救済という意味では全く役に立たない。

私たちはコーランから、神に愛されたしもべであるアブラハムでさえ、自分の父親のためにとりなすことができなかったことを学ぶ（9:114）。ノアは自分の息子のためにとりなすことができなかった（11:46）。ムハンマドは自分の叔父（111:1-3）や親族（9:80）のためにとりなすことはできなかった。預言者や聖者が、どこの馬の骨とも知れない他人のためにとりなし

てくれるなどと、なぜ思えるのだろうか？！（2:48, 123; 6:51, 70, 94; 7:53; 10:3; 19:87; 26:100; 30:13; 32:4; 36:23; 39:44; 40:18; 43:86; 53:26 & 74:48 を参照）。ムハンマドの「とりなし」については、25:30 に記されています。